

高松市 幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業 中間成果報告

令和5年11月8日



高松市教育委員会 高松市総合教育センター



高松市

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業 中間成果報告

1. 架け橋期のカリキュラムの方針
2. 架け橋期のカリキュラム～開発プロセス～
 - ①子どもの学びを伝え合い、毎年、評価・改善していく
 - ②「地域の子どもを共に育てる」という意識の醸成
 - ③担当に依存しない持続可能な学校・園・所の体制づくり
3. 教師の指導・援助及び子供の学びの変化
4. 次年度以降の展望

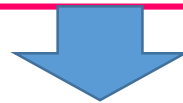
1 架け橋期のカリキュラムの方針

カリキュラム開発会議

- ・事務局(教育委員会)
- ・コーディネーター
- ・4つの開発校区
- ・有識者
- ・関係部局

【本市の連携・接続の実態・課題を理解し、改善に向けた方策を検討】

- | | |
|---------------------------|---|
| ・ <u>就学前施設での「遊びの中の学び」</u> | <u>小学校教員に伝わりにくい</u> |
| ・ <u>交流活動</u> | <u>就学前の子どもが主体的に参加しにくい</u> |
| ・ <u>連携・接続</u> | <u>担任間に留まり、架け橋期のカリキュラムが学校・園・所で共有されにくい</u> |
| ・ <u>複数の就学前施設のある小学校区</u> | <u>連携や交流が進みにくい</u> |



相互の子どもの育ちを理解し、子どもの学びをつなぎ伸長する連携・接続へ

1 架け橋期のカリキュラムの方針

【高松市がめざす連携・接続のテーマ】

子どもの学びをつなぐ 持続可能な 保こ幼小連携・接続

- ①気軽に対話できる教職員関係の構築
- ②子どもの学びの共有と分析
- ③連携校区の実態に即した接続期カリキュラムの充実・改善



- ◆ カリキュラムを作成したら終わりではなく、小学校区の実態に即したカリキュラムとなるように、子どもの学びを伝え合い、毎年、評価・改善していく。
- ◆ 取組の方向性を管理職と委員とが共有し、学校・園・所全体での取組にする。
- ◆ 「地域の子どもを共に育てる」という意識を醸成する。
- ◆ 地域の環境等を取組に活かす。
- ◆ 高松市全体の取組になるために、子どもに関わる関係者が推進方法を考え発信する。

①子どもの学びを伝え合い、毎年、評価・改善していく

共に育てたい子どもの姿

交流活動

計画・実践

子どもの姿

環境

評価・改善

対話・分析・共有

校区の実態に即した 学びをつなぐ 架け橋期のカリキュラム

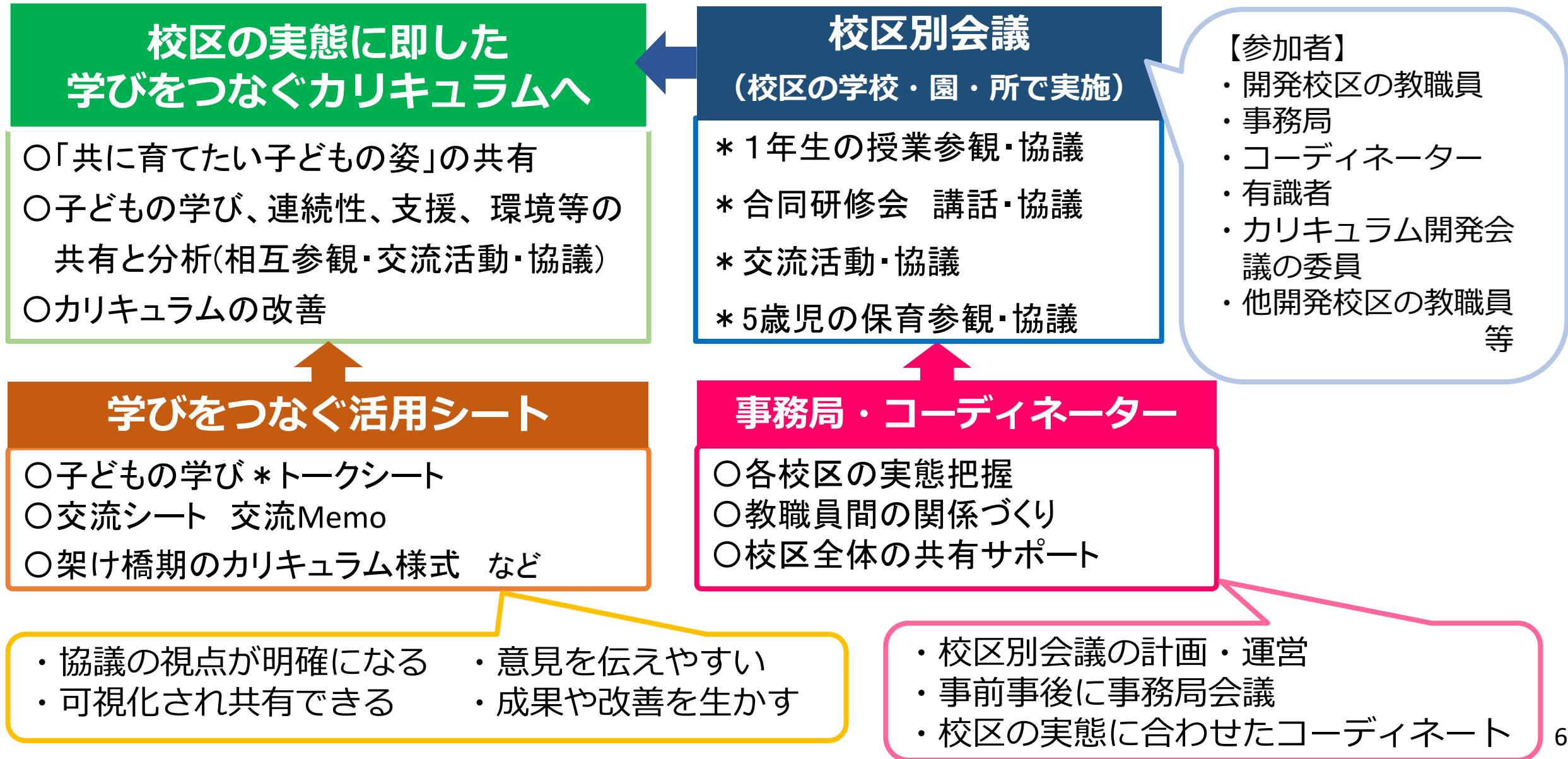
每年度反映

子どもの学び

支援

環境

2ー①子どもの学びを伝え合い、毎年、評価・改善していく



校区の実態に即した 架け橋期のカリキュラムへ

①「共に育てたい子どもの姿」の共有

②相互参観・協議

- ・子どもの学び、連続性、支援、環境等の分析と共有

③交流活動・協議

- ・交流計画、協働実施、評価・改善

④カリキュラムの改善

- ・会議で共有した内容をカリキュラムに反映

校区別会議 (校区の学校・園・所で実施)

* 4月～5月

1年生の授業参観・協議

* 8月

合同研修会と兼ねる
講話・協議

* 10月～11月

交流活動・協議

* 1月～2月

5歳児の保育参観・協議

子どもの学び✿トークシート

学びの可視化

子どもの学びを捉える
架け橋期に必要な支援・環境を省察

資質・能力の3つの柱で
学びの連続性を捉える

対話・分析・共有



やってみたいことに挑戦する
あきらめずに取り組む
主体性・自立心・技能習得

コマの回転の特徴、遠心力等
に気付く
法則性、関連性の発見



友達同士で教え合う、
支え合う
**目的の共有・協働性
言葉による伝え合い**

こま回し

新たな遊び方を考え
試し、工夫する
思考力・試行錯誤・探究心

主体性・自立心・技能習得

法則性、関連性の発見

資質・能力

思考力・試行錯誤・探究心

目的の共有・協働性
言葉による伝え合い

まあるい「こころ」で遊ぶ(学ぶ)子ども

子どもの姿

- ・ 「なわとび」で 3人以上で 遊ぶ
- ・ なわを片付けたいと
何人か
トイ
アール
友達と 一緒に 遊ぶ
- ・ チャレンジカードに
自分の目標を決めて書く
- ・ カートを見せあて 今度は50
- ・ 「こま」 まわし方を工夫
発想 (まこ) 偶然に
色画用紙を使って
風車のように
まこりをテープで止めてみる
色画用紙にしてみる etc
- ・ トリッジボール
一緒に友達と遊ぶ
みんなで
- ・ トラブル 解決に向けて話し合う
「セーフでやり直そう」「アクトヤ」
「出て来てからまた入るけん」

学びに向かう力・人間性等..

資質能力の
視点からのみどり = 小学校
と共有しやすい

1月24日 10時

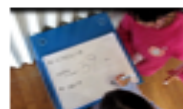
校区別会議 5歳児の保育参観・協議 (R5.1月~2月)

5歳児2月の遊びや生活の写真シート

羽根つき



- 風船とシャトルがあることで、それぞれの違いを感じる
- 広い場所、安全な牛乳パックの羽子板



- ホワイトボード、マーカー
- 子どもが必要に応じて使用できる



my 羽子板作り

- 牛乳パック、ビニールテープ、マジックなどを準備し、制作できる場



当番活動

- どんな当番が必要か相談して決める
- 子どもが扱いやすい場所

四人でかるた



- 保育者も遊びのなかまとして
- 遊びのルールの共有
- 取れた嬉しさ、取られたい何しさを共有

二人でかるた



あやとり

- 一人一人のやってみよう気持ちに寄り添い、支える
- 長く回るコツ、方法を試せる
- 友達同士をつないでいく関わり
- 子どもの考えを引き出し、つないでいく



こままわし

文本に触れる、興味をもつ

取れた歌を歌えたり、友達と比べたりする

読み手の声を聴き、素早くカード探し、歌う

人歌に合わせて、自分たちで挑戦しながら遊びをつくらせていく

知識及び技能の基

思考力・判断力・表現力等の基

友達と同じ目的に向かって、協力

どうすれば風船を落とさずに打てるか考えたり動いたりする

前回の記録と比べながら挑戦

基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得

身体感覚の育成

規則性、法則性、連続性の発見

様々な気持ち、発見の喜び

日常生活に必要な言葉の理解

多様な動きや芸術表現のための基礎的な技能の獲得 など

遊びや生活の中で、豊かな体験を通して

何を感じたか、何に気付いたか、何が分かる

たり、何が出来るようになったりするのかな

思いやり・安定した情緒・自信・相手の気持ちの受容・好奇心、探究心

芸術、自分への向き合い、折り合い・話し合い、目的の共有、協力

色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚・自然現象や社会現象への関心 など

心算・算数・図文が得意で、いかによい生活を送るかなど

思考力・判断力・表現力等の基

試行錯誤、工夫

予想、予測、比較、分類、確認

他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ

言葉による表現、伝え合い

繰り返し、次への見直し

自分なりの表現・表現する喜びなど

遊びや生活の中で、気付いたことでも

よく知ったことなども使いつながり、どう考え

たり、何が出来るようになったりするのかな

思いやり・安定した情緒・自信・相手の気持ちの受容・好奇心、探究心

芸術、自分への向き合い、折り合い・話し合い、目的の共有、協力

色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚・自然現象や社会現象への関心 など

心算・算数・図文が得意で、いかによい生活を送るかなど

学びに向かう力・人間性等

自分との向き合い

自分の気持ちを相手に伝える



給食

- 個に応じた配慮
- 自分で量を調整しながら食べられるような受容的な雰囲気



自分のやりたい遊びに向かって

- 繰り返し取り組める遊べる時間の確保
- 存分に体を動かして遊べる場所

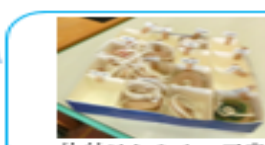
回ったこまを羽子板に移す



- やってみたいことが実現できる場
- おもしろい遊びを考え出す
- 画用紙、ペットボトルの蓋、種など身近な材料



回っているこまに身近なものを載せる



片付けしやすい工夫



遊びの振り返り

- 互いの気持ちや考えを伝え合える場
- 意見を肯定的に捉える
- 安心して思いを伝えられる
- 具体的な物、動きも取り入れて分かりやすい状況づくり

■ : 経験していること □ : 支援・関わり □ : 環境

主体性



コミュニケーション

幼児期の学びをつなぐ
1年生スタート期の支援・環境

安心感

1年生スタートカリキュラムでの実践



5歳児の参観や協議で、5歳児の学びや生活の状況を理解しておくことは、1年生スタート期の子どもの実態に即した支援や環境を考え、実践していくうえで、大変有効である。

校区の実態に即した 架け橋期のカリキュラムへ

①「共に育てたい子どもの姿」の共有

②相互参観・協議

・子どもの学び、連続性、支援、
環境等の分析と共有

③交流活動・協議

・交流計画、協働実施、評価・改善

④カリキュラムの改善

・会議で共有した内容をカリキュラ
ムに反映

校区別会議 (校区の学校・園・所で実施)

* 4月～5月

1年生の授業参観・協議

* 8月

合同研修会と兼ねる
講話・協議

* 10月～11月

交流活動・協議

* 1月～2月

5歳児の保育参観・協議

学びをつなぐ活用シート

交流・連携年間計画

令和 年度 ○○校区 交流・連携年間計画 ○○保育園・○○幼稚園・○○小学校

共に育てたい子どもの姿『 』

月	会合 (その種類)	内 容	大切にしたいこと	場所 (担当)
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
1				
2				
3				

交流シート

共に育てたい子どもの姿

交流活動『 』 年 月 日 (場所)

ね	幼	
ら		
い	小	

③(幼児と小学生・保育者と小学校教員) ★(幼児・保育者) ◆(小学生・小学校教員)

【時間】 活動内容: 保育者や小学校教員の援助・指導

【 』

成	幼	
果		
・		
改	小	
善		

交流Memo

交流での子どもの学びMemo ③(幼児と小学生) ★(幼児) ◆(小学生)

知識及び技能(基礎): 思考力・判断力・表現力等(基礎):

力・人間性等:

知識及び技能(基礎):

- 基本的な生活習慣や生活に必要な技能の獲得
- 身体感覚の育成
- 規則性、法則性、関連性の発見
- 様々な気付き、発見の喜び
- 日常生活に必要な言葉の理解
- 多様な動きや芸術表現のための基礎的な技能の獲得 など

思考力・判断力・表現力等(基礎):

- 試行錯誤、工夫
- 予想、予測、比較、分類、確認
- 他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ
- 言葉による表現、伝え合い
- 繰り返し、次への見通し
- 自分なりの表現・表現する喜びなど

学びに向かう力・人間性等:

- 思いやり ・安定した情緒 ・自信 ・相手の気持ちの受容 ・好奇心、探究心
- 寛容、自分への向き合い、折り合い ・話し合い、目的の共有、協力
- 色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚 ・自然現象や社会現象への関心 など

主体的、対話的で深い学びにつながる
互惠性のある交流活動を計画、実施

互恵性のある交流活動に向けて

課題

- ・互いのねらいが共有されていない
- ・小学校任せ

改善

- ・事前に協議
ねらい、内容、
教職員の連携



共に育てたい子どもの姿

「自分で考え行動し、
まあいい心で自分や友達を
大切にできる子ども」

交流で大切にしたいこと

【事前協議】

交流のねらいや内容、教職員の連携、準備物などについて伝え合い、協議したことを「交流シート」に書き込むことで、小学校任せではなく、協働して進めていく意識化につながる。

交流Memo

事後協議

交流シート

【事後協議】「交流メモ」を使い、子どもの様子を伝え合い、「資質・能力の3つの柱」に関連づけながら、ねらいが達成できたか、交流したからこそ育ち合ったことは何かなど、有効な支援、環境、改善点について共有する。成果や課題を「交流シート」に記録し、次の活動や、次年度の交流に活かせるようにする。

2-①子どもの学びを伝え合い、毎年、評価・改善していく

対話・共有

共に育てたい子どもの姿

生活・遊び・学習

交流活動

- * 子どもの学び
- * 支援
- * 環境構成・教材

每年度反映

架け橋期のカリキュラム

1年生スタートカリキュラム

校区别会議で共有した、子どもの学び、支援、環境構成を校区の架け橋期のカリキュラムに反映させ改善していく。 1

16

対話・分析・共有

令和 4 年度
高松市作成の参考様式を基に作成

[illegible]

令和4年度の取組を反映改善した令和5年度カリキュラム

D校区では、「子どもの意見」を取り入れ、子どもとともにつくっていく視点などを追加。

2-①子どもの学びを伝え合い、毎年、評価・改善していく

カリキュラム参考様式の見直し

令和 年度 ○○校区 アプローチ・スタートカリキュラム

子どもの実態と育てたい力

幼稚園・小学校教育の目的・目標
『学びの基礎力の育成』
(資質・能力の3つの柱)は
連続性・一貫性をもって構成

＜共に育てたい子どもの姿＞

期 統続期前期 (5歳児10月～3月) 【学びの芽生え (遊びの中での学び)】 統続期後期 (1年生4月～7月) 【自覚的な学び (教科等の学習を通じた学び)】

5歳児10月 11月 12月 1月 2月 3月 1年生4月 5月 6月 7月

子どもの学び

① 架け橋期のカリキュラム

② 5歳児4月～1年生3月までの2年間にする
月で区切らず校区の実情に合わせて記入する

③ 子どもの学びと環境構成・支援の関連が分かる
ようにする

④ 幼児期の学びを生かしていくことが具体的に分かるような表記等の工夫をする

⑤ 実践後の評価・改善点を記入できる欄を設ける

⑥ 参観・交流・協議で利用した計画案やトークシート・交流メモ等を添付する

開発会議での実践や検証を基に『カリキュラム参考様式』の項目を見直している。

タイトルを「架け橋期のカリキュラム」とし、「スタートカリキュラム」との違いを明確にするなど、見直した参考様式を今後提案していく。

2 架け橋期のカリキュラム～開発プロセス～

②「地域の子どもを共に育てる」という意識の醸成

地域の子どもを共に育てようという意識を高め、連携・接続を協働的に進めていくために、校區別会議で、その年の連携・接続の目標を共有する。

学びをつなぐ活用シート

幼小連携・接続のスモールステップの指標

高松市総合教育センター R4.3



0 ☆ ☆ ☆
連携の予定・計画
が まだ無い

1 ☆ ☆ ☆
連携・接続に着手し
たいがまだ検討中
である

2 ☆ ☆ ☆
年数回の授業行事、
研究会などの交流が
あるが、接続を見通し
た教育課程の編成・実
施は行われていない

3 ☆
授業、行事、研究会
などの交流が充実し、
接続を見通した教育
課程の 編成・実施
が行われている

4 ☆ ☆
接続を見通して編
成・実施された教
育課程について、
実践結果を踏まえ、
更によりよいもの
となるよう検討が行
われている

0	☆	☆☆	☆☆☆	1	☆	☆☆	☆☆☆	2	☆	☆☆	☆☆☆	3	☆	4	☆☆
連携の予定・計画が まだない	1つ実施	2つ実施	3つ実施	すべて実施	1つ実施	2つ実施	3つ実施	すべて実施	1つ実施	2つ実施	3つ実施	すべて実施	1つ実施	すべて実施	すべて実施
	①②③④ のうち				⑤⑥⑦⑧ のうち				⑨⑩⑪⑫ のうち				⑬⑭ のうち		⑮⑯

2-②「地域の子どもを共に育てる」という意識の醸成

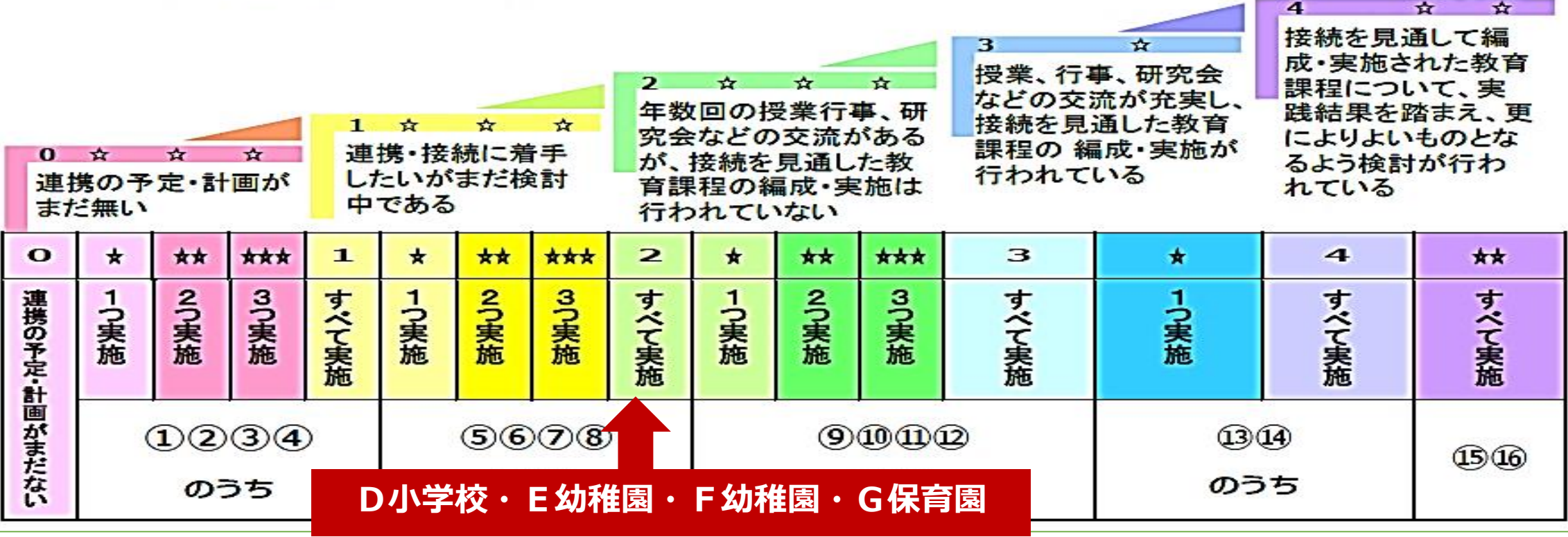
	連携・接続の具体内容
ステップ0↓1	①各学校・施設の担当者が、市教育委員会主催「保こ幼・小合同研修会」に参加し、幼小連携教育の意義・方法や他施設の取組等を知る。 ②各学校・施設に担当者を置き、連携施設と定期的に意見交換会を開催する。 ③意見交換の中から、交流授業、行事などを企画・実施し、子ども同士の交流、教職員の交流を推進する。 ④全教職員の理解と協力が得られる体制をつくる。
ステップ1↓2	⑤年数回程度の授業、行事、研究会などの交流を年間指導計画などに位置付けて実施する。 ⑥交流の事前だけでなく事後の反省・検証を行い次の交流につなげていく。 ⑦市教育委員会提供の様式等を参考に、接続カリキュラムを編成する。 ⑧編成した接続カリキュラムを実施する。
ステップ2↓3	⑨年間計画に位置付けた授業、行事、研究会などの交流を恒常的に実施する。 ⑩子どもの姿から学びを読み取り、適切な教育環境や教職員の関わり等を省察する協議を実施する。 ⑪就学前施設と小学校の教職員が子どもの実態を確認し合い、育ちがつながるように接続カリキュラムを編成する。 ⑫連携の実践を踏まえ、接続を見通した教育課程を編成・実施する。
ステップ3↓4	⑬子どもの実態に即した接続カリキュラムの改善を行い、次年度につなげる。 ・PDCAサイクルの確立 ・学期末ごとや年度末に反省・検証 ・就学前施設と小学校の教職員が共通理解しながら作成する。 ⑭学校・施設全体のカリキュラムとなるように、全教職員での共通理解及び改善を行う。 ⑮接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。 ⑯近隣地域の園、所、学校と連携し、地域全体で取り組んでいる。
参考：幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開（R3 年 2 月・文部科学省）	

「幼小連携・接続のスマールステップ指標」の連携・接続の具体内容を参考に、現在の校区の連携・接続状況について伝え合い、取り組めそうな内容を相談し、今年度の目標として取り組む。

令和5年2月連携・接続の状況

D 校区

高松市総合教育センター R4.2



教職員間で協働し子どもの主体性が育まれる交流活動やカリキュラムを改善しようとする関係が築かれた

D 校区では、子どもの主体性が育まれる交流活動やカリキュラムを改善しようとする関係が築かれ、連携・接続の状況がステップアップした。

2-②「地域の子どもを共に育てる」という意識の醸成

「共に育てたい子どもの姿」の共有



内容の質・スモールステップ



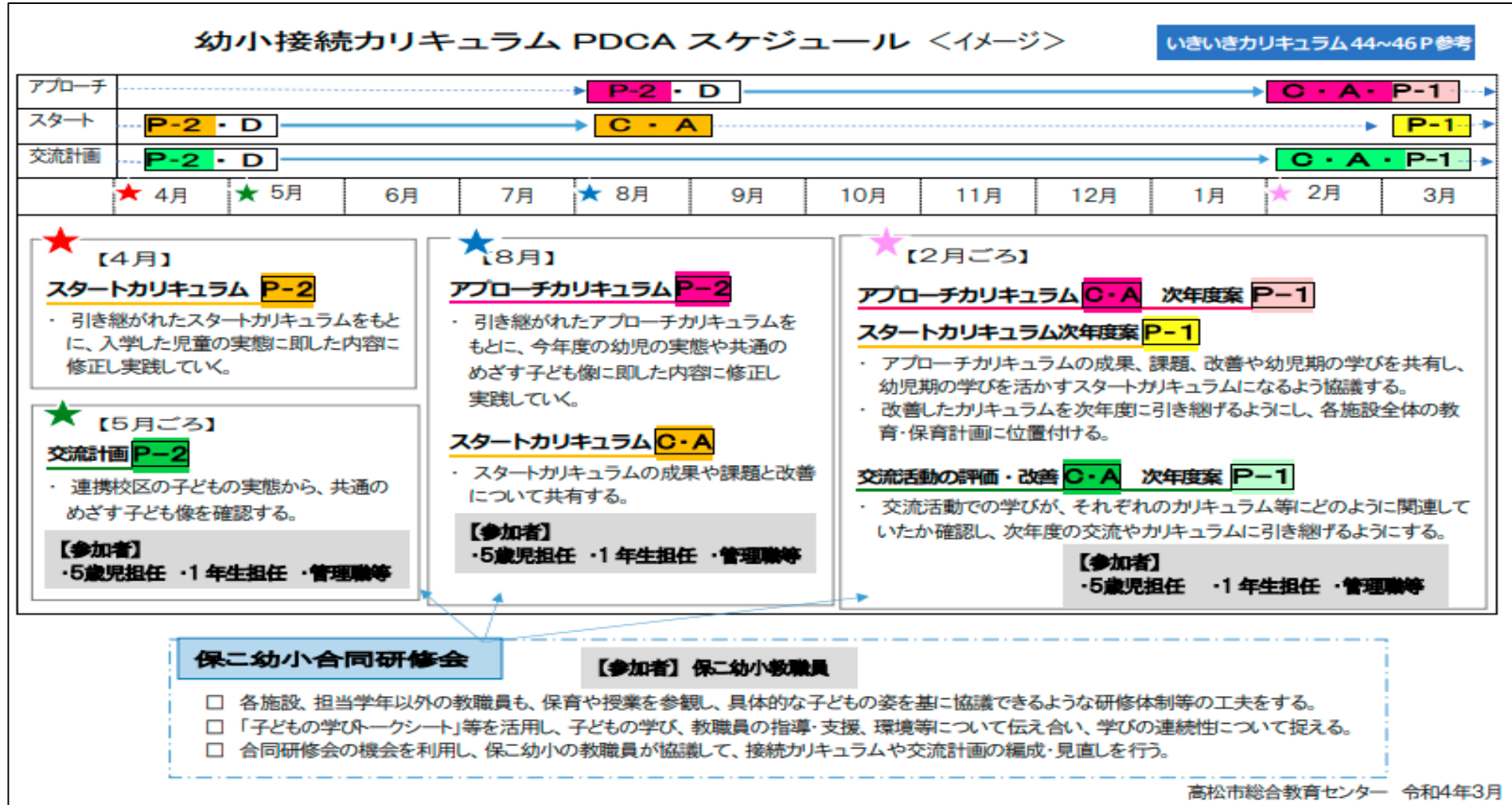
連携方法の工夫



留意点として、ステップアップを急ぐあまり、交流や連携が、形だけ、その年だけのものにならないように、教職員の業務改善も念頭におきながら、オンラインを活用して共通理解を図ったり、撮影した映像をもとに協議したりするなど連携方法の工夫が必要である。

2 架け橋期のカリキュラム～開発プロセス～

③担当に依存しない持続可能な学校・園・所の体制づくり



架け橋期のカリキュラムを改善する体制が、学校・園・所全体のカリキュラム・マネジメントとして位置付けられ、持続可能なものとなるように、「幼小接続カリキュラムPDCAスケジュール」をもとに、市主催の合同研修会を年間3回位置付けている。

管理職のリーダーシップのもと、学校・園・所全体での共通理解が重要である。

3 教師の指導・援助及び子供の学びの変化

校区別会議

- 校区や地域の実態が分かり、校区の実態に即したカリキュラム開発として大変重要であることが分かった。
- 校区の連携・接続に関するステップの目標を共有化できた。
- 校区の教職員、管理職が気軽に参加し、多面的に子どもを理解することができる場となってきた。
- 校区別会議を重ねることで、気軽に対話できる関係が築け、「共に育てたい子どもの姿」をめざした連携を進めていこうとする意識が高まった。
- 管理職等の参加が増え、持続可能な連携・接続に向けた体制づくりが進んできた。
- 管理職間の連携（校区内会議・保幼間会議等）が進んできた。
- 他の開発校区での取組を参考にし、主体的に取り組むようになった。

3 教師の指導・援助及び子供の学びの変化

「子どもの学びトークシート」「交流シート」などツールの有効性

【就学前施設教職員】

- 遊びの中の学びが見取れるようになり、学びを言語化し共通理解が図られ、小学校教員に伝えるようになった。
- 園内研修でシートを活用し協議することで、就学前教育の質の保障につながっている。

【小学校教員】

- 子どもの新たな学びに気付き、子ども一人一人の気付や育ちに目を向けることの重要性等、見方・考え方が変化してきた。
- 幼児の活動や経験を具体的に知ることができ、遊びの中の学びの理解につながった。

3 教師の指導・援助及び子供の学びの変化

互惠性のある交流活動

【幼児・1年生】

○自分の思いを出し合いながら活動でき、相手意識や親しみの気持ちを高めることができた。

【1年生】

○保育者や幼児からの質問に、経験したことを分かりやすく言葉や動作で伝える育ちが見られた。

○相手が喜んでくれたことで自信や自己有用感が高まった。

【幼児】

○安心して、やってみたいことに関わったり、思いを伝えたりすることができた。

○主体的に活動できたことで、交流活動後も、1年生が考えたり工夫したりしていたことを真似たり、繰り返し試したりするなど、園・所での遊び(学び)につながった。

3 教師の指導・援助及び子供の学びの変化

互惠性のある交流活動

【教職員】

- 幼児、小学生の実態(発達)や就学前施設と小学校の生活、環境、保育・授業内容を知る機会となった。
- 交流したことで得られる学びを見取り、共有し、子ども理解が深まった。
- 交流をすることが目的ではなく、「どの時期に、どのような交流を取り入れたら互いの子どもの学びにつながるのか」と交流の意義を意識するようになった。
- 子どもの実態に即した保育・授業づくり、教育・保育の質の向上につながった。
- 気軽に話せる教職員の関係性が築けた。

【オンラインでの交流】

- 対面での交流だけでなく、オンライン交流も効果的に組み入れることで、相手意識の高まりや継続につながった。
- 令和5年度は、各校区で主体的に交流を行い、ICTの活用も進み始めた。

3 教師の指導・援助及び子供の学びの変化

互恵性のある交流活動のメリット

相互理解

幼児、小学生の実態（発達）や就学前施設と小学校の生活、環境、保育・授業内容を知る機会となる。

保育・授業の質の向上

子どもの実態に即した保育・授業づくり、教育・保育の質の向上につながる。

子ども理解

交流したことで得られる学びを見取り、共有することで、子ども理解が深まる。

教職員関係づくり

気軽に話せる教職員の関係性が築ける。

「互恵性のある交流活動のメリット」「互恵性のある交流活動のポイント」を開発校区の交流活動の取組とともに合同研修会で紹介したことで、市内の各校区でも、互恵性のある交流活動についての理解や取組が広がり始めている。

3 教師の指導・援助及び子供の学びの変化

互恵性のある交流活動のポイント～開発校区の取組から～

R5.8月 高松市総合教育センター



①交流前協議のポイント

★校区の「共に育てたい子どもの姿」につながる交流内容であることの確認。

★遊びや学習の中で学んできたこと。
・興味や関心、単元内容など具体的に。

★幼児と小学生それぞれの「ねらい・めあて」。
・交流活動を通して経験すること。

★教職員の協働。

- ・就学前施設の教職員が小学生に、小学校教員が幼児に関わるなど。

★「ねらい・めあて」を達成するための「内容」「教職員の支援・連携」「環境・教材」の共有理解。
・交流シートの活用。
・主体的・対話的で深い学びの保障。
・ペアの組み方の意図を確認し、交流の内容に応じて考える。
・交流場所の経験地図。



②交流時のポイント

★安心できる場、出会い。

- ・交流前に期待を膨らませたり見通しをもって準備できたりするような配慮。
- ・知っている場所、遊び、これまでの経験が生かせる内容。
- ・分かりやすいこと（視覚化、具体物、言葉）。
- ・1年生が楽しんでいると幼児も安心して取り組める。

★主体性を引き出す・・問い、環境、時間、雰囲気。

- ・1年生も幼児も主体的に関わり表現できる。
- ・先生が決めすぎない・・子どもが選んだり、考えたり、協力したりできる。
- ・1年生がこれまでの学びを発揮でき、認められる。
- ・1年生が幼児に親しみを感じ、相手のことを思いながら関われる。
- ・幼児が1年生の様子から学び真似る。
- ・子どもたちが活動の流れを理解し、見通しをもって活動できる。
- ・先生が感じたことを表現するなどモデルとなっていることを意識する。

★親しみを感じる状況づくり。

- ・「〇〇ちゃん」という相手意識がもてるようなペア（グループ）での活動。
- ・顔を合わせ、触れ合う活動。
- ・名前を呼び合う（呼んでほしい名前・名札）。

★交流の進め方、教職員の連携。

- ・就学前施設と小学校の先生が協力して、互いに気軽に確認しながら進める。
- ・子どものつぶやきを取り入れる。
- ・1年生が進行する場面、先生が進行する場面を見極める。



③交流後協議のポイント

★交流時の幼児、小学生の学びを見取る。

- ・子どもの姿から、資質・能力を共通の視点に。
- ・「交流メモ」の活用。

★交流後の学びのつながりを伝え合う。

- ・交流で得た学びが、5歳児の遊びの中でどのように生かされたか。
- ・1年生は振り返りノートにどのようなことを記入しているか。

★「ねらい・めあて」「共に育てたい子どもの姿」につながる交流であったか評価する。

- ・子どもの学びを引き出す環境・支援。
- ・主体的・対話的で深い学びが保障される環境・支援。

★評価・改善点を記録し次の交流に活かす。

- ・「交流シート」の活用。
- ・接学期カリキュラムへ反映。

★連携方法の工夫。

- ・オンラインの活用。

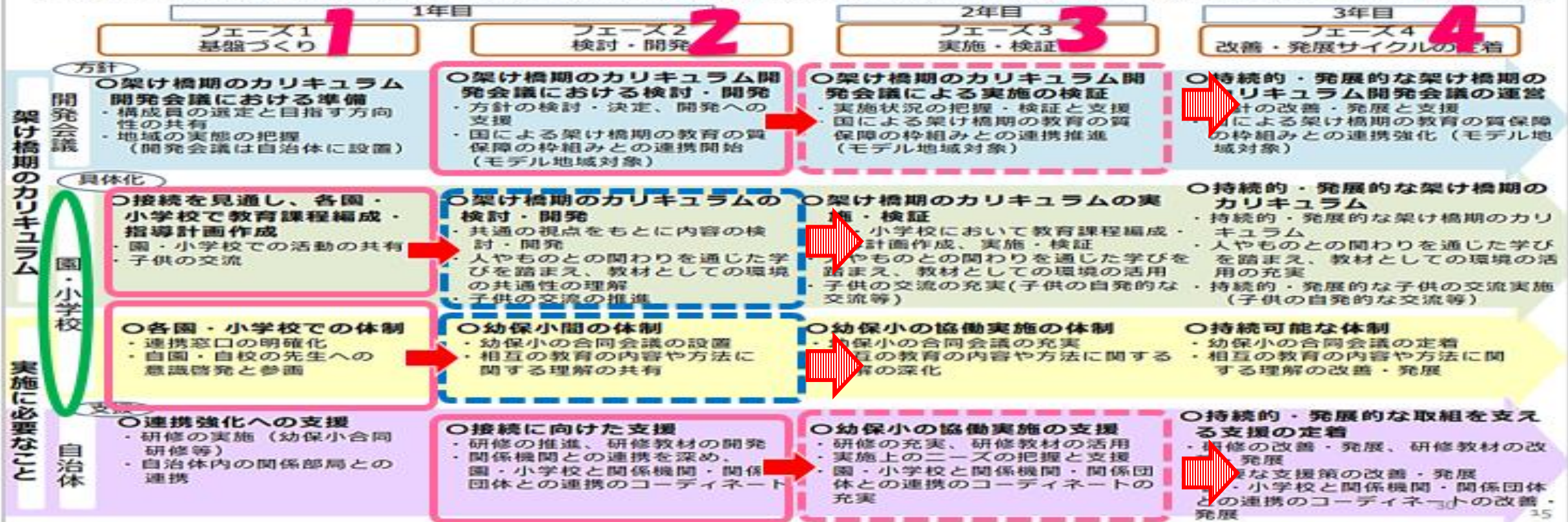


4 次年度以降の展望

【架け橋プログラムのフェーズ】 令和5年3月の高松市・開発校区

2-(6) 進め方のイメージ

注：基盤づくりから改善・発展サイクルの定着に至るまでのプロセスの目安。実際には、地域の実態に応じ、各フェーズ間を行きつ戻りつしながら発展していく。



開発校区・自治体の連携・接続のフェーズが少しずつ進んできた。担当者や担任が替わっても取組が引き継がれ、改善されるよう、フェーズを行きつ戻りつしながらも、子どもの学びをつなぐことを共通理解しながら進めていくことが大事である。

4 次年度以降の展望

子どもの学びをつなぐ 持続可能な 保こ幼小連携・接続

- ①気軽に対話できる教職員関係の構築
- ②子どもの学びの共有と分析
- ③連携校区の実態に即した接続期カリキュラムの充実・改善

気軽に対話できる関係



子どもを中心に



子どもの学びの共有

1年目の取組で、**架け橋プログラムの基盤がつくられ**、現在、研究開発校区では、研究の柱である「いつでも気軽に伝え合える教職員の関係」を築きながら、子どもの姿を中心に語り合い、子どもの学びの共有や分析が行えるようになってきた。令和6年度は、**①②の取組を持続、発展**させながら、**③の「連携校区の実態に即した接続期カリキュラムの充実・改善」**を重点的に取り組んでいく。

4 次年度以降の展望

市内全ての校区で取り組めるよう、架け橋プログラムを進めていく要件を各フェーズごとに分析し、関連する事例も含めて参考資料としてまとめ、発信していく。

◆「子どもの学びをつなぐ架け橋期のカリキュラム（仮）」の資料編成

- 架け橋プログラムを進めていく要件を各フェーズごとに分析
- 架け橋期の具体的な子どもの学び・環境(教材)・支援
- 互恵性のある交流活動のポイント・交流例
- 架け橋期のカリキュラム改善
- 1年生スタートカリキュラム事例(幼児期の学びを生かした授業・環境)
- 連携・接続のPDCAサイクルと学校・園・所の体制づくり(管理職の役割) など

